

ジョシュワ・ハルバースタム著 桜田直美訳

『仕事と幸福、そして、人生について』(ディスカヴァー・トゥエンティワン、2009年)

仕事をめぐる世界は、長期雇用の動揺、成果主義の拡大などにより急激に不安定化が進んでいる。このような不安定な時代に、どのように仕事と向かいあえばよいのかが、問われている。

本書は、コロンビア大学で哲学を講じ、経営コンサルタントでもある著者が2000年に著した『Work』を翻訳したものである。そのメインテーマは、「よい人生というものは仕事を抜きにしては語れない」ことであり、その仕事とは、「いちばん大切にしている自分の価値とともにあるものであり、自分の人生をどのように進めたいのかという基準を示すもの」である。このよう視点から「仕事」をめぐる世界が描かれている。

著者によれば、21世紀の「仕事」は、経済のグローバル化 テクノロジーの進化 労働に関する意識の変化という3つの趨勢から、従来のような継続的な仕事を「持つ」ことから、仕事を「する」ことへの重点の移行が起こっているという(第1章 働く理由)。このため、いつでも誰にでも当てはまる「ワーク」と「ライフ」との釣り合った生活は成立せず、「ワーク」と「ライフ」の均衡点の最適解は、その時々個々人のなかにあるとする(第2章 ワークライフバランスの罫)。一方、働く目的としては、金銭的なインセンティブには限界があり、報酬はあくまでも仕事自体にあることを指摘し(第3章 働く目的)、人生の成功の基準は、地位や金銭的な報酬などではなく、また、個々人の目標の実現であるよりも、目標達成を目指す過程のなかにあるとする(第4章 成功の基準)。それらの点からは、キャリア選択を支える自らの自信の確立が要諦であり、そのためには自己分析で陥りやすい過大評価と過少評価の罫から自らを解き放つ方途を探っている(第5章 自己分析の罫)。さらに、自らの自信の確立には、仕事以外の休息とは異なる能動的な「余暇」の実現が、「仕事」同様に「よい人生」にとって必要不可欠であることを提起している(第6章 再び、ワークとライフについて)。

経済のグローバル化やテクノロジーの革新は、産業、企業、さらに、個々人の技術や知識の寿命の急速な短期化をもたらし、働く人は、会社への所属のあり方や仕事に関する知識や技術の研鑽が不断に問われることになる。本書は、著者の複合的なキャリアが活かされ、「仕事」について歴史や哲学、さらには心理学などをまじえ語られる一方、「ワークライフバランス」や「成果主義」、「リーダーシップ」、「マネージメント」、「モチベーション」などといった企業経営における重要なテーマの意味内容にも触れられており、「仕事」を考える上での重要なヒントを豊富に与えてくれる。

ところで、著者が21世紀の「仕事」としてイメージする世界は、グラフィックデザイン、編集、コンピュータテクノロジー - などプロジェクト単位、クライアント単位に、雇用主 - 雇用者というよりもクライアント - クライアントといった対等な関係の構築が想定されている。著者によれば、新たな関係の構築の過程を通して我々は「自由」を獲得するという。これらの提起は、現時点から見ると、楽天的に過ぎる感が否めない。我々の日々の生活で不断に選択しながら仕事を「する」ことは、特定の社会や職場集団に所属しないことを意味するが、そのことに誰もが耐えられるのだろうか。さらに、2000年からの10年の経験は、雇用における「自由」の拡大が容易に働く人の社会的排除や貧困問題と結びつく現実であった。21世紀の「仕事」は、個々人の選択を担保する人材育成に繋がる仕事の創出・拡大と再チャレンジを可能とするセーフティネットの構築が、必要不可欠であるといえよう(井出久章)